

教学の手引き

2011

西洋史学専攻

文学部

Table of Contents

西洋史学専攻

I 西洋史学専攻 教学紹介

| | |
|---|----|
| ① 教学理念・目標 | 3 |
| ② 履修の仕方 | 3 |
| ③ 履修モデル | 5 |
| ④ 科目概要 | 11 |
| ⑤ 演習の手引き | 14 |
| テーマリサーチ型ゼミナールにおける卒業論文（非卒論形式含む）の提出について ... | 18 |

II 科目一覧と履修方法

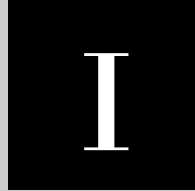
| | |
|--------------|----|
| ① 科目一覧 | 20 |
| ② 履修方法 | 20 |

「教学の手引き」の使い方

「教学の手引き」は、専攻・プログラムにおける皆さんの学びの指針となるものです。
毎年配布される履修要項とあわせて、履修に役立ててください。

この「教学の手引き」は、皆さんが卒業するまで使用するものです。
再配布はしませんので、大切に保管してください。

記載内容に変更・追加がある場合は文学部ホームページ（URL：http://www.ritsumei.jp/lt/lt07_j.html）や掲示で随時発表しますので、定期的に確認をしてください。



西洋史学専攻 教学紹介

1 教学理念・目標

<教学理念>

西洋史学では、時代的にも地域的にも、またテーマの上でも、きわめて多様な範囲を扱っています。しかし、「なぜ学ぶか」という点では、次の2つのことが共通の目標となります。第一に、現代世界が歴史的にいかにして形成されたのかを、幅広い視野から理解すること。第二に、「過去」の時代を異なった社会・文化として認識し、それと「現在」の我々の社会・文化と対比することによって、人間の多様な在り方や可能性を知ること。このように歴史を学ぶことによって、自らの思考と感性を磨き、現代社会に生きる力を培うことができるでしょう。

以上の大きな目標に向かって、それぞれの問題意識から特定の時代、領域のテーマを見出し、そこから可能なかぎり全体を見渡せるような歴史的視野を広げていくことが大切です。専門としての歴史研究は、あくまで現代社会に生きるための視野の広さを身につけ、変化に対する鋭敏な感性と異なった社会・時代への豊かな想像力を培うためにこそ、役立たなければなりません。

<教学目标>

- (1) 西欧・中東欧・アメリカ合衆国、さらには植民地支配下の諸地域なども視野に入れて、世界史的な展望の中で「ヨーロッパ」を理解します。
- (2) 現代世界の歴史的形成を幅広い視野から理解することによって、今日の政治・経済・文化などのアクチュアルな問題に対処する力量を身につけます。
- (3) 過去の社会・文化と対比することによって、人間の多様な在り方や可能性に対する関心を深め、「他者」に開かれた感性や想像力を磨きます。
- (4) 調査・研究のための基本的なツールや技術を学ぶと同時に、口頭発表、レジュメ・レポート・論文作成をつうじて自分の思考や見解を正確かつ効果的に伝えるコミュニケーション技術を学びます。
- (5) 外国の歴史を学ぶために必要な「話す・聞く・読む」語学力を身につけます。

2 履修の仕方

〔1回生〕

「西洋史研究入門」で行う研究発表の演習をつうじて、自分の問題関心にもとづくテーマを立てて文献・資料を図書館やオンラインで探求し、文献・資料を読み、テーマの発表に必要な材料を集め、発表のレジュメを作り、プレゼンテーションの準備をするという一連の研究の手順を実地で学びます。さらに、授業の場でプレゼンテーションを効果的に行う訓練もします。この授業で学ぶ研究や発表に必要な基本的な技術や知識は、大学の4年間をつうじてゼミ発表や卒論研究にとって土台となるものです。前期の「リテラシー入門」ではライティング・コンピューター操作・キャリア設計などの基礎を学びます。「西洋史概説Ⅰ～Ⅴ」は古代から現代までの歴史を全体的に俯瞰する科目です。広く歴史の流れを理解することは、自分のテーマ研究を広い視野で位置づけることになるばかりではなく、ゼミで他人の発表について議論に参加する上で欠かせない基礎知識ともなります。卒論のテーマ発見のきっかけになることも多いです。人文科学総合講座にある「史学概論Ⅰ・Ⅱ」と並んで、西洋史研究への入門です。1回生のうちは幅広く本を読み、専門に限定されない関心の幅を広げたいものです。「教養科目」で専門以外の分野について広い知見と関心を養います。「外国語科目」は西洋史の研究に必要なばかりか、とくに留学の準備には欠かせません。在学中に大学等の制度を利用して留学を考えている人は、早くから計画を立てて語学科目に力を注ぐことが必要です。

〔2回生〕

「西洋史基礎講読」では本格的な歴史研究書（邦語）を批判的に読み解き、そこから歴史研究の実際（テーマや視点の立て方、史料の解釈、など）を学びます。それによって、自分の卒論テーマについての構想を具体的なものにします。2回生の終了時には卒論テーマの大枠が決められるようにする必要があります。「西洋史特殊講義Ⅰ～Ⅲ」は最新の研究テーマの講義による専門的な西洋史研究への入門です。多彩な講義から自分の卒論研究への刺激を受

けて下さい。「西洋史講読演習Ⅰ」では、1回生での外国語学習の土台の上に、卒論研究に必要となる英語文献の講読力を養います。英語の本が読めるようになれば世界が大きく開け、卒論テーマの選択の幅が広がります。イノベーション副専攻にある「英語アドヴァンスト・コース」はさらに高度な英語運用能力を身につけるためのもので、将来本格的な留学を考えている人や大学院進学を考えている人に推奨します。西洋史研究にとってエリアスタディ副専攻も重要です。とくに、「北米コース」と「イタリア・コース」はそれぞれの地域の歴史と文化をより深く学びたい人に向いています。

以上のように、2回生は卒論のイメージを具体化させ、邦語・英語を中心とした研究文献を読み解く技術を身につけ、研究力の土台作りの時期です。大学院進学を考えている人は語学に力を入れて、しっかりした卒論研究の計画を立てたいものです。

〔3回生〕

「西洋史講読演習Ⅱ」では個人発表を行い、討論をつうじて自分の卒論テーマの具体化し、基本文献の読み込みを進めます。3回生の終わり頃から4回生の始めにかけてがキャリア活動のピークとなりますから、なるべく早い段階に卒論の構想を固める必要があります。そこで、3回生の終わりには卒論の骨子を小論文にまとめてもらうレポート課題を課します。2回生に引き続き「西洋史特殊講義」や「西洋史講読演習Ⅰ」を履修します。「西洋史の理論と実践」は「西洋史講読演習Ⅰ」を高度化した内容のもので、最新の英語文献を集中的に読み込みます。大学院進学希望の人は必ず履修してください。人文科学総合講座に設置された「外国文化講読」は英語および他の外国語による文献講読を行ないますので、英語はもちろんのこと、テーマによっては必要になる他の外国語のクラスを履修します。3回生から自分のキャリアについて本格的に考え始めますが、夏休み中に行なわれるインターンシップは企業・自治体・学校などで実地に業務を体験するものですが、職業というものについて理解を深め、自分自身のキャリア・イメージを具体化する上で刺激になりますから、積極的に参加してください。大学院進学希望者は学内で大学院説明会が春と秋に開催されますので、出席してください。また、4回生時に大学院科目を受講できる大学院進学プログラムの試験が年度末にあります。詳しくは教員に相談してください。

〔4回生〕

4回生では就職活動と卒論作成が車の両輪です。両立は大変ですが、いずれも4年間の大学生活の集大成ともいえるべきものですから、悔いのないように全力で取り組んでください。大学院進学予定者については7月に学内進学試験があり、9月（秋入試）と2月（春入試）には一般入試が実施されます。詳しくは大学院入試要項を参照してください。

3 履修モデル

モデル1：古代・中世史

| 科目区分 学年 | 必修科目 | 登録必修科目 | 専攻科目 | 教養科目・他専攻・ 人文科学総合講座等の科目 | 資格課程・副専攻等 |
|------------|---|--|------------|--|--|
| 1 回生 | 西洋史研究入門 | 史学概論Ⅰ(人文) 西洋史概説Ⅰ・Ⅱ リテラシー入門 (教養) | | 哲学概論Ⅰ(哲学) ヨーロッパ史概論(人文) イタリアの言語と文化・入門Ⅰ(教養) グローバルヒストリーⅠ(学際) | |
| | | 史学概論Ⅱ(人文) 西洋史概説Ⅲ | | 哲学概論Ⅱ(哲学) 宗教と社会(教養) グローバルヒストリーⅡ(学際) イタリアの言語と文化・入門Ⅱ(教養) | |
| 2 回生 | 西洋史基礎講読 西洋史講読演習Ⅰ | 西洋史概説Ⅳ 西洋史特殊講義Ⅰ・Ⅲ | 西洋史学史 | キリスト教思想Ⅰ(人文) ラテン語Ⅰ(人文) ギリシャ語Ⅰ(人文) 神話学Ⅰ(人文) | イタリア文化講義Ⅰ イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅰ(エリア) |
| | | 西洋史概説Ⅴ 西洋史特殊講義Ⅱ・Ⅳ | | キリスト教思想Ⅱ(人文) ラテン語Ⅱ(人文) ギリシャ語Ⅱ(人文) 社会史Ⅱ(人文) 神話学Ⅱ(人文) | イタリア文化講義Ⅱ イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅰ(エリア) |
| 3 回生 | 西洋史講読演習Ⅰ 西洋史講読演習Ⅱ 外国文化講読 (2008年度以前入学 生のみ登録必修) | 西洋史特殊講義 Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ | 西洋史の理論と実践Ⅰ | ヨーロッパ文化史Ⅰ(学際) 他者認識の歴史(学際) | イタリア文化研究 イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅱ(エリア) |
| | | 西洋史特殊講義 Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ | 西洋史の理論と実践Ⅱ | ヨーロッパ文化史Ⅱ(学際) 歴史人類学の諸問題(学際) | イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅱ(エリア) 海外エリアスタディ実習 |
| 4 回生 | 西洋史演習 卒業論文 | | | | |

このモデルのテーマ：ヨーロッパ文明の伝統や歴史的基礎の形成を政治・経済・文化・宗教など幅広い視点から研究し、EUのヨーロッパを生み出した歴史的過去について深く知る。

凡例：教養科目(教養)；人文科学総合講座(人文)；学際プログラム(学際)；哲学専攻(哲学)

モデル2：近現代史

| 科目区分 学年 | 必修科目 | 登録必修科目 | 専攻科目 | 教養科目・他専攻・ 人文科学総合講座等の科目 | 資格課程・副専攻等 |
|------------|---|---|--------------------------|--|---|
| 1 回生 | 西洋史研究入門 | 史学概論Ⅰ（人文） 西洋史概説Ⅰ・Ⅱ リテラシー入門（教養） 史学概論Ⅱ（人文） 西洋史概説Ⅲ | | ヨーロッパ史概論（人文） グローバルヒストリーⅠ（学際） イタリアの言語と文化・入門Ⅰ（教養） グローバルヒストリーⅡ（学際） メディアと現代文化（教養） 科学技術と倫理（教養） イタリアの言語と文化・入門Ⅱ（教養） | |
| 2 回生 | 西洋史基礎講読 西洋史講読演習Ⅰ | 西洋史概説Ⅳ 西洋史特殊講義Ⅲ 西洋史概説Ⅴ 西洋史特殊講義Ⅳ | 西洋史学史 | ヨーロッパ現代思想Ⅰ（哲学） 社会史Ⅱ（人文） ヨーロッパ現代思想Ⅱ（哲学） メディア論（人文） | イタリア文化講義Ⅰ イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅰ（エリア） イタリア文化講義Ⅱ イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅰ（エリア） |
| 3 回生 | 西洋史講読演習Ⅰ 西洋史講読演習Ⅱ 外国文化講読 (2008年度以前入学 生のみ登録必修) | 西洋史特殊講義Ⅲ 西洋史特殊講義Ⅳ | 西洋史の理論と実践Ⅰ 西洋史の理論と実践Ⅱ | 近現代の諸相（学際） 歴史認識・叙述の諸問題（学際） 地域と移動（学際） | イタリア文化研究 イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅱ（エリア） イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅱ（エリア） 海外エリアスタディ実習 |
| 4 回生 | 西洋史演習 卒業論文 | | | | |

このモデルのテーマ：近代ヨーロッパの形成を政治・社会・経済・文化など幅広い視野で学び、現代世界の抱える諸問題の歴史的な背景を深く理解する。

凡例：教養科目（教養）；人文科学総合講座（人文）；学際プログラム（学際）；哲学専攻（哲学）

モデル3：社会史（心性・表象）

| 科目区分 学年 | 必修科目 | 登録必修科目 | 専攻科目 | 教養科目・他専攻・ 人文科学総合講座等の科目 | 資格課程・副専攻等 |
|------------|---|--------------------------------------|------------|---|--|
| 1 回生 | 西洋史研究入門 | 史学概論Ⅰ（人文） 西洋史概説Ⅰ・Ⅱ リテラシー入門（教養） | | 文化人類学Ⅰ（学際） 比較文化講義Ⅰ（学際） 民族と文明の美術史（学際） メディアと現代文化（教養） イタリアの言語と文化・入門Ⅰ（教養） | |
| | | 史学概論Ⅱ（人文） 西洋史概説Ⅲ | | 文化人類学Ⅱ（学際） 比較文化講義Ⅱ（学際） 映像と表現（教養） イタリアの言語と文化・入門Ⅱ（教養） | |
| 2 回生 | 西洋史基礎講読 西洋史講読演習Ⅰ | 西洋史概説Ⅳ 西洋史特殊講義 Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ | 西洋史学史 | 文化とポストコロニアル批評Ⅰ（学際） 西洋近代美術史（学際） | イタリア文化講義Ⅰ イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅰ（エリア） |
| | | 西洋史概説Ⅴ 西洋史特殊講義 Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ | | 文化とポストコロニアル批評Ⅱ（学際） ヨーロッパの美術・デザイン（学際） 社会史Ⅱ（人文） | イタリア文化講義Ⅱ イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅰ（エリア） |
| 3 回生 | 西洋史講読演習Ⅰ 西洋史講読演習Ⅱ 外国文化講読 （2008年度以前入学生のみ登録必修） | 西洋史特殊講義 Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ | 西洋史の理論と実践Ⅰ | 比較文学論Ⅰ（学際） | イタリア文化研究 イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅱ（エリア） |
| | | 西洋史特殊講義 Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ | 西洋史の理論と実践Ⅱ | 比較文学論Ⅱ（学際） 音楽文化論（学際） | イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅱ（エリア） 海外エリアスタディ実習 |
| 4 回生 | 西洋史演習 卒業論文 | | | | |

このモデルのテーマ：西洋史学専攻で歴史的方法論について学び、文化の比較や表象研究に関わる諸科目を中心に、人間文化の多様な差異について深く研究し、他者理解を身につける。

凡例：教養科目（教養）；人文科学総合講座（人文）；学際プログラム（学際）；哲学専攻（哲学）

モデル4：社会史（女性史・ジェンダー）

| 科目区分 学年 | 必修科目 | 登録必修科目 | 専攻科目 | 教養科目・他専攻・ 人文科学総合講座等の科目 | 資格課程・副専攻等 |
|------------|---------------|--|-----------------------------|---|--|
| 1 回生 | | 西洋史研究入門 | | ジェンダー論（教養） グローバルヒストリー I（学際） 比較文化講義 I（学際） イタリアの言語と文化・入門 I（教養） | |
| | | 史学概論 I（人文） 西洋史概説 I・II リテラシー入門（教養） | | グローバルヒストリー II（学際） 比較文化講義 II（学際） イタリアの言語と文化・入門 II（教養） | |
| 2 回生 | | 西洋史基礎講読 西洋史講読演習 I | 西洋史学史 | 民俗学 I（人文） 芸術とメディア（学際） | イタリア文化講義 I イタリアの言語とコミュニケーション応用 I（エリア） |
| | | 西洋史特殊講義 I・III・V・VII | | 民俗学 II（人文） 社会史 II（人文） メディア論（人文） | |
| 3 回生 | | 西洋史講読演習 I 西洋史講読演習 II 外国文化講読 (2008年度以前入学 生のみ登録必修) | 西洋史の理論と実践 I 西洋史の理論と実践 II | 文化とポストコロニアル批評 I（学際） ジェンダー・ポリテイクス（学際） | イタリア文化研究 イタリアの言語とコミュニケーション応用 II（エリア） |
| | | 西洋史特殊講義 II・IV・VI・VIII | | 文化とポストコロニアル批評 II（学際） ジェンダーと文化（学際） | |
| 4 回生 | 西洋史演習 卒業論文 | | | | |

このモデルのテーマ：西洋史専攻で歴史的方法論について学び、ジェンダー論や女性史に関わる諸科目を中心にジェンダーやセクシュアリティに関する問題を深く考え、現代社会と文化に関する理解を深める。

凡例：教養科目（教養）；人文科学総合講座（人文）；学際プログラム（学際）；哲学専攻（哲学）

モデル5：社会史（ネイション・エスニシティ）

| 科目区分 学年 | 必修科目 | 登録必修科目 | 専攻科目 | 教養科目・他専攻・ 人文科学総合講座等の科目 | 資格課程・副専攻等 |
|------------|---|--|--------------------------|---|--|
| 1 回生 | 西洋史研究入門 | 史学概論Ⅰ（人文） 西洋史概説Ⅰ・Ⅱ リテラシー入門（教養） | | スポーツと現代社会（教養） 文化人類学Ⅰ（学際） グローバルヒストリーⅠ（学際） 比較文化講義Ⅰ（学際） イタリアの言語と文化・入門Ⅰ（教養） | |
| | | 史学概論Ⅱ（人文） 西洋史概説Ⅲ | | メディアと現代文化（教養） 文化人類学Ⅱ（学際） グローバルヒストリーⅡ（学際） 比較文化講義Ⅱ（学際） イタリアの言語と文化・入門Ⅱ（教養） | |
| 2 回生 | 西洋史基礎講読 西洋史講読演習Ⅰ | 西洋史概説Ⅳ 西洋史特殊講義 Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ | 西洋史学史 | エスニシティとネーションⅠ（学際） 文化と文化批判Ⅰ（学際） メディア論（人文） | イタリア文化講義Ⅰ イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅰ（エリア） |
| | | 西洋史概説Ⅴ 西洋史特殊講義 Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ | | エスニシティとネーションⅡ（学際） 文化と文化批判Ⅱ（学際） 社会史Ⅱ（人文） | イタリア文化講義Ⅱ イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅰ（エリア） |
| 3 回生 | 西洋史講読演習Ⅰ 西洋史講読演習Ⅱ 外国文化講読 （2008年度以前入学生のみ登録必修） | 西洋史特殊講義 Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ 西洋史特殊講義 Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ | 西洋史の理論と実践Ⅰ 西洋史の理論と実践Ⅱ | 他者認識の歴史（学際） 文化とポストコロニアル批評Ⅰ（学際） | イタリア文化研究 イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅱ（エリア） |
| 4 回生 | 西洋史演習 卒業論文 | | | 歴史人類学の諸問題（学際） 文化とポストコロニアル批評Ⅱ（学際） 音楽文化論（学際） | イタリアの言語とコミュニケーション応用Ⅱ（エリア） 海外エリアスタディ実習 |

このモデルのテーマ：西洋史学専攻で歴史的方法論について学びつつ、エスニシティや近代国民国家に関する諸問題に関わるさまざまな科目を履修して、現代社会について深く理解する。

凡例：教養科目（教養）；人文科学総合講座（人文）；学際プログラム（学際）；哲学専攻（哲学）

モデル6：近現代史（アメリカ）

| 科目区分 学年 | 必修科目 | 登録必修科目 | 専攻科目 | 教養科目・他専攻・ 人文科学総合講座等の科目 | 資格課程・副専攻等 |
|------------|---|------------------------------------|--------------------------|---|-----------------------------------|
| 1 回生 | 西洋史研究入門 | リテラシー入門(教養) 史学概論Ⅰ(人文) 西洋史概説Ⅳ | | アメリカ史概論(人文) グローバルヒストリーⅠ(学際) 映像と表現(教養) | |
| | | 史学概論Ⅱ(人文) 西洋史概説Ⅴ | | ヨーロッパ史概論(人文) グローバルヒストリーⅡ(学際) メディアと現代文化(教養) エリアスタディ入門(教養) | |
| 2 回生 | 西洋史基礎講読 西洋史講読演習Ⅰ | 西洋史概説Ⅰ 社会史Ⅱ(人文) 西洋史特殊講義Ⅶ | 西洋史学史 | エスニシティとネーションⅠ(学際) 英米文学概論Ⅰ(英米) | 北米地域研究概論Ⅰ(北米) |
| | | 西洋史概説Ⅱ 西洋史概説Ⅲ 西洋史特殊講義Ⅷ | | ヨーロッパ文化史Ⅱ エスニシティとネーションⅡ(学際) 英米文学概論Ⅱ(英米) | 北米地域研究概論Ⅱ(北米) |
| 3 回生 | 西洋史講読演習Ⅱ 西洋史講読演習Ⅰ 外国文化講読 (2008年度以前入学生のみ登録必修) | 西洋史特殊講義Ⅴ 西洋史特殊講義Ⅵ | 西洋史の理論と実践Ⅰ 西洋史の理論と実践Ⅱ | | 北米地域の社会と制度(北米) 海外エリアスタディ実習(北米) |
| 4 回生 | 西洋史演習 卒業論文 | | 西洋史の理論と実践Ⅲ 西洋史の理論と実践Ⅳ | 地域と移動(学際) | 北米地域の文化と民族(北米) |

このモデルのテーマ：西洋史専攻で歴史的方法論について学びつつ、文学部のアメリカに関するさまざまな科目を履修して、アメリカの社会や文化について深く考える。
 凡例：教養科目(教養)；人文科学総合講座(人文)；学際プログラム(学際)；英米文学専攻(英米)；エリアスタディ副専攻(北米)；副専攻(北米)

4 科目概要

〔専攻科目〕（専門科目）

< 演習 >

1 回生から 4 回生まで、卒論作成という到達目標のために中心となる場が、演習（ゼミナール、略称ゼミ）です。演習はお互いの調査・研究の成果を発表・討論しあうことによって、相互に知見と認識を交換する学びの共同性の場です。そのなかで、自分一人の研究では実現できないような相互の発見と知的興奮を体験し、お互いを高めあうことができます。また、単純なことです。演習での討論をつうじて他人の語りに耳を傾け、それに応答するというコミュニケーションの基本、モラルを身につけてほしいと思います。

〔西洋史研究入門〕（1 回生 コア科目 登録必修）

西洋史の最新の基本的テーマをとりあげ、それに取り組むことによって歴史的な思考力を養い、テキストの批判的な読みからはじまって、テーマの設定、資料調査、分析、そして研究成果の発表にいたる実際的な手続きを実習します。「考え、調べ、表現する」基本的な技術の習得が目標ですが、口頭発表にとどまらず、成果を論理的な文章にまとめる「論文」作成の訓練も重んじています。これによって、大学生活の基本であるレポート・論文、さらには卒論を書く基本的な力を養うことができるでしょう。

〔西洋史基礎講読〕（2 回生 コア科目 登録必修）

卒論作成の基礎力を養うために基本文献を主体的に読み解く力を身につけます。最近の研究書のなかから選ばれた共通の日本語文献を批判的・体系的に読みます。優れた研究書を精読することによって、視点やテーマを構想するコツ、分析の仕方、資料の扱い方などを学び取ります。

〔西洋史講読演習Ⅱ〕（3 回生 コア科目 登録必修）

「講読演習Ⅱ」は時代別のクラスに分かれて、それぞれの卒論研究の成果を何度か中間発表し、お互いに検討しあい、テーマを深めてゆきます。ゼミでの討論をつうじて、検討しなければならない具体的な課題を明確にし、資料調査を進めていきます。レポート・論文の書き方の実際については、専攻で配布する『西洋史学専攻 卒業論文の葉』を参照してください。

〔西洋史演習〕（4 回生 コア科目 必修）

卒論を書くことを前提において、全体構想、各部分の章の内容を発表し、論文としての構成、論理、実証性を備えたものになるように、ゼミで批評・コメントを交換していきます。レポート・論文の書き方の実際については、専攻で配布する『西洋史学専攻 卒業論文の葉』を参照してください。

〔西洋史講読演習Ⅰ〕（2 回生以上 2 科目登録必修）

卒論を準備する上で洋書（とくに英語）を読みこなせることが、十分な研究をするために必要なことです。さまざまなテーマを扱った英語のテキストを講読することによって、実践的な文献読解力を鍛えます。そのためには、時間をかけて予習し、なるべく多くの量の文献を読破していくことが大切です。並行して、自分の分野・テーマの外国語文献を調査し、早くから原書に親しんでください。

〔西洋史の理論と実践Ⅰ～Ⅳ〕（3・4 回生）

主として大学院進学希望者および高度な卒論研究をめざす者を対象に、西洋史研究のために不可欠な方法的・理論的な素養を身につけ、また、史料やテキストのより高度な批判的読解の力量を身につけることを目標とします。受講条件としては前年度の小集団科目で優秀な成績をおさめ、また、事前面接によって適当と認められることです。なおこの科目は大学院との共通開講科目です。

<講義>

〔西洋史概説Ⅰ～Ⅴ〕（1回生 コア科目 登録必修）

古代（Ⅰ）、中世（Ⅱ・Ⅲ）、近現代（Ⅳ・Ⅴ）のそれぞれの時代について、歴史の全体的な展望が持てるように、概観することが目的の講義です。1回生配当の登録必修科目ですが、場合によっては2年次までに履修するとよいでしょう。その場合には、近現代（Ⅳ・Ⅴ）を1年次に、古代・中世（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）を2年次に履修することが望ましいです。概説を学ぶことによって、基本的な諸問題についての知識を身に付けるとともに、自分の関心が西洋史の展開のなかでどのような位置にあるかを知ることができます。また、狭い専門に閉じこもることなく、ゼミなどでさまざまなテーマに関心を持ち、発言できるためにも必要な「基礎教養」でもあります。

〔西洋史学史〕（2回生）

「歴史」はつねにその時代の要請にしたがって大きく書きかえられ、またその対象とする領域を拡大してきました。とくに、現代歴史学は方法論や問題意識の両面で革新的な変化を遂げたと言われます。「西洋史学史」は、そうした新しい問題意識・方法への招待です。この現代歴史学が成立した過程と歴史的背景を考察します。人文科学総合講座にある「史学概論Ⅰ・Ⅱ」とともに、西洋史研究の大きな枠組みを知るために基本的な科目です。2回生配当です。

〔西洋史特殊講義Ⅰ～Ⅷ〕（2回生以上 2科目登録必修）

最新の興味深い個別の研究分野・テーマへの入門です。年によって担当者や講義の主題は変わりますが、原則として半期完結で8種類の多彩な講義が準備されています。歴史研究の面白さは具体的な事例や資料に触れることによって、はじめて知ることができます。「特殊講義」はそのための機会を提供し、それをつうじて新しい問題意識、テーマ、研究方法などについて具体的に知ることができます。

〔教養教育科目〕

A群

1年次から学ぶ、講義形式の基礎教養科目です。専門に閉じこもらずに、幅広く知見を広げることは、人間とその文化の全体を対象とする歴史研究にとって大切なことです。自分の関心に応じてバランスよく選択することで、基礎力を身につけてください。

B群

このなかで、1回生配当の「リテラシー入門」は登録必修です。小論文により文章作成を実習し、4年間をつうじ求められるレポートや卒業論文に不可欠な技法を学びます。

A・B群の科目については『履修要項』を見てください。

〔人文科学総合講座〕（専門科目）

皆さんは、歴史研究の問題意識を深めて、方法論を磨くために専攻以外の専門科目を積極的に学ぶ必要があります。1回生から3回生まで配当されています。なかでも、次の諸科目が西洋史専攻の学生に関連します。

〔史学概論Ⅰ・Ⅱ〕（1回生以上 登録必修）

歴史を学ぶことの意義や歴史研究の基本を講義し、歴史学の世界に導入することを目的とします。「過去をつうじて現在を考える」知の営みの理論や技法について基礎的な知識を学びます。

〔外国文化講読〕（3回生以上 ※2008年度以前入学生のみ登録必修）

さまざまな外国語について原書のテキスト講読を行ないます。「西洋史講読演習Ⅰ」とともに西洋史の研究に必須な外国語の講読力を身につけます。

〔ヨーロッパ史概論〕、「アメリカ史概論」（1回生以上）

登録必修ではありませんが、積極的に履修して下さい。

〔外国語科目〕

第1外国語を8単位（1・2回生）、第2外国語を6単位（1回生）取得することが必要です。第1外国語は英語、第2外国語はドイツ語・フランス語・イタリア語・スペイン語です。西洋史は外国の文化と歴史を対象とする学問ですから、英語やその他の外国語を学ぶことは基礎教養として不可欠です。

また、社会人学生は外国語の履修方法が異なりますので、『履修要項』をご覧ください。

| 第1外国語 | 第2外国語 |
|-------|----------------------------|
| 英語 | ドイツ語・フランス語・イタリア語 ・スペイン語 |

〔その他の科目〕（専門科目）

西洋史以外の諸専攻・人文総合科学インスティテュート学際プログラムの諸科目

人文総合科学インスティテュート学際プログラムには最新の人間科学の知見と方法を学べる刺激に満ちた科目が数多くあります。上記の「人文科学総合講座」となると、各自のテーマ・関心に応じて積極的に受講してください。英米文学専攻や哲学専攻などにも西洋史研究に役立つ科目が数多くあります。

テーマリサーチ型ゼミナール

テーマリサーチ型ゼミナールは、2003年度からスタートした、文学部が擁する従来の枠組みでは捉えきれない人文学のあらたな分野やテーマ、アプローチを、ゼミ形式で大胆に実践していく、まったく新しい形態のゼミナールです。21世紀の「知」のグローバル化を目指して、人文学に共通する普遍的なテーマ、特定地域を多面的にリサーチしうるテーマ、現在進行形のタイムリーなテーマ、新世紀の社会に直結する実践、実習的テーマなど、現代社会が人文学に求める革新的テーマを設定します。また、テーマリサーチ型ゼミナールでは革新的・斬新なテーマを追求するためにも、常にゼミテーマを見つめ直しています。3回生のゼミ選択の際には、卒業時（4回生）にどのようなテーマで研究をし、卒業論文執筆をしたいかといったことを考え、ゼミを選択します。その際、自専攻のゼミ、テーマリサーチ型ゼミナールといった選択肢の中で自分に適するゼミを選んでください。テーマリサーチ型ゼミナールでどのようなテーマのゼミが開講されているのかはシラバスで確認をしてください。以下に2011年度、3回生ゼミのいくつかを記しますので是非参考にしてください。

2011年度3回生ゼミテーマ

例) 「説き方の表現と教育心理学」、「中国映画から現代中国の文化を考える」、「THEMES IN ASIAN STUDIES」

2回生後期のゼミ選択の際には、3～4年次にどのようなテーマで研究をし、卒業論文執筆をしたいかといった事を考え、ゼミを選択します。自専攻のゼミ、テーマリサーチ型ゼミナールといった選択肢の中で自分に適するゼミを選んでください。

〔卒業論文〕（必修）

卒業論文は4年間の研究の集大成です。これまで自分の主体的な研究を進めながら、演習で何回も成果を中間報告し、教員や仲間からさまざまなコメントや批判、アドバイスを受けてきたわけですが、そうした積み重ねの上に全力を傾注して納得のいく論文を仕上げたいものです。具体的にどのような手順で進めていくべきかについては、各回生の演習において指導を行います。そのために、専攻で独自に用意した『西洋史学専攻 卒業論文の栞』を3回生演習から配布します。

卒業論文提出までの手続きについては履修要項『卒業論文』の提出についてを参照してください。

5 演習の手引き

小集団教育科目＝演習＝ゼミとは？

ゼミは論理的思考の訓練の場です。自分の考えていることは、どのような根拠に基づいているのでしょうか？そしてそのような根拠は、他人が見ても納得できるようなしっかりしたものなのでしょうか？クラスでの発表、ディスカッション等を通じてものを考える訓練をしてもらいます。それは、信頼に足る根拠に基づいた、論理を構築する訓練でもあるのです。

同時に、ゼミは、情報・データの収集、処理の訓練の場です。図書館で本や論文を探したり、それを読んで必要な箇所を探したり、ノートを取ったりして、様々なデータを自分のものにします。クラスでの勉強を通じて、価値ある情報をどのように探すのか、手に入れた情報をどのようにして評価するのか、そのような訓練をしてもらいます。

その集大成として、論文（ペーパー）などを書きます。ペーパーは、調べたことをそのまま要約してまとめるような、いわゆるレポートとは全く異なるものです。論文の詳細は後に述べますが、調べもの、思考、発想を総合的に表現するものです。

発表とは？

クラスの中で行う作業のうち、大きな比重を占めるのが発表です。西洋史研究入門では、毎回の授業で、全員が読んでくるべきテキストの部分が決められています。分担を決めて、担当の人（またはグループ）はその週の内容について、テキストの範囲を超えて、事典や図書館の本でより詳しく調べ、まとめて発表することになります。発表は、研究入門の授業の大きな要素です。第一に、評価の対象ですので、きちりと担任の先生に自分の勉強をアピールする場です。これは説明の必要ないことでしょうか。第二に、自分が「先生」になって、クラスメートに教える、情報を伝える訓練をする場でもあります。自分が調べたことを、どうしたらみんなに興味を持ってもらえるか、面白いと思ってもらえるか、そのような気持ちを持って準備をすることがとても大切なのです。逆に、聞く側の立場に立った時も、仲間が発表しているのですから、できるだけ興味を持って聞いてあげる気持ちがあるといいですね。自分が発表している時に、寝たりされると哀しいものですよ。

読む・まとめる

本をどう読むのか、どうまとめるのか、については、いろいろ説明を読むよりも、実際にその作業をやってみて、もがき苦しむ、自分なりのコツをつかんでいくのが一番だと思います。もちろん、本屋には様々な入門書が置いてあって、それぞれ、一般的な解説をしてくれています。とりあえずそのような入門書を読みたい人には、

・木下是雄『レポートの組み立て方』（ちくま学芸文庫、1994年）

をおすすめしておきます。スタンダードといえればスタンダードなのですが、かなり初歩的なものです。これだけでは不足ですから、

・鹿島茂『勝つための論文の書き方』文集新書295（文藝春秋、2003年）

を是非読んでみてください。キワモノ本のようなタイトルですが、論文を書く以前の発想の段階、特にいかに「問い」を立てるかという点について真面目に論じています。「自由に論じなさい」と言われて困っている人は、手に取ってみることをお勧めします。さらに、

・本多勝一『中学生からの作文技術』朝日選集762（朝日新聞社、2004年）

を読んでみてください。「中学生」どころか、大学の先生にも読ませたいぐらい役に立つ本です。日本語の基本的な作文の仕方について、自己訓練をする教材になります。

いずれにせよ、真剣に自分のトピックと取り組み、まとめる作業を行うと、その努力というのは自然と発表やプリントににじみ出るものです。逆に、いい加減な作業は、発表を聞いている先生やクラスメートにすぐばれてしまいます。自分の頭脳の能力の限界に挑戦するつもりで本を読んで、いろいろ考えてみてください。

レジュメ

大学用語で発表プリントのことを指します。発表の参考資料です。3つの要素が含まれている必要があります。第一は、皆さんがしゃべる内容の「アウトライン」です。プリントを見れば、この発表の内容は、こういふことで、この順番で話が進むのだな、ということが一目でわかる必要があります。つまり、皆さんの発表の内容が論理的に構成されていて、そ

れを反映したプリントでなければなりません。第二は、「資料」としての内容です。皆さんの発表を理解するために役に立つような図表、歴史的資料、解説などが、重要な項目について挙げてあることが必要です。それも素っ気ない数項目だけのアウトラインと図表のコピーがはりつけてある、というのではなく、両者が密接に関連したレイアウトを工夫してください。皆さんの発表の「観客」であるクラスメートにとって、わかりやすくてためになる、そのようなプリントを目指しましょう。なお、発表で皆さんがしゃべる内容が一字一句書いてあるような、原稿そのものはレジュメにはなりません。第三は、「参考文献」リストです。発表をする上でお世話になった本や論文、事典類を正確に挙げてください。

発表の心得

クラスでは発表の時間が限られているので、与えられた時間の中でおさめることが必要です。自信のない人は、友人とリハーサルをして、感覚をつかむ練習をしてもいいでしょう。また、30~40人の人に聞いてもらうのですから、(1) 大きな声でしゃべる、(2) 前を見て、みんなと目を合わせながら発表する、(3) 聞く人が楽しんでくれるようなサービス精神を持つ、ことが必要です。きまじめな人は、原稿を用意してきて、それを読み上げる人もいますが、それは望ましくありません。内容を頭に入れておいて口頭で説明する能力は、それ自体、皆さんに身につけてもらいたいものなのです。言い換えれば、発表は、パブリック・スピーチ、パフォーマンスの側面も持っています。近い将来、就職試験の面接を受けたり、会社で会議をしたりするときに、必ず必要とされる技術ですので、今から意識して練習するといいいでしょう。

また、学期の限られたスケジュールの中で発表の分担を決めていますから、ドタキャンは厳禁です。寝坊や準備が間に合わなかったなどの理由は論外です！病気などでどうしても発表の日に来られないときは、できるだけ授業が始まる前までにTAか担当教員に相談すること。何の連絡もない場合は、再発表の機会が与えられなくなる場合もあります。レジュメの提出期限については、クラスによって方針が違いますので、教員の指示に従ってください。

論文とは？

発表の準備で行う作業と、論文作成で行う作業の間に本質的な違いはありません。ただ、論文はより厳密に、より徹底的に調査し、そしてそれを文章という形で表現する点において、より高度な作業だといいいでしょう。論文の核は、「○○は××である。」という statement（日本語では主張とか結論とか命題とかいろいろな言い方をします）です。その statement を、歴史的事実、事件などを用いて証明、説明します。つまり、自分の statement の正しさを立証するものが論文なのです。ですから、論文は、必ず主張の形を取らなくてははいけません。ただ調べたことが羅列してあるだけでは論文とは呼べません。

Statementとは？

さて、その statement は、歴史学では「解釈 interpretation」「説 thesis」などと呼びます。これは、それ自体では意味をもたない膨大な歴史的事実の中に意味を見だし、歴史の叙述を作る作業の本質です。歴史的事実や事件（データと呼んでいいでしょう）はそのような叙述をする際の材料に過ぎません。

実は、大学で学ぶ学問というものは、分野は違っていても statement とデータの関係にそれほど大きな違いはありません。たとえば、物理や化学では「定理」と「実験データ」になったり、社会学では「理論」と「調査データ」になったりします。いずれにしても、それぞれの学問分野で扱う膨大なデータを単純化し、意味づけをし、我々が直感的に理解できるものにする。そのような「抽象化」の作業が学問の本質です。

理論は、そのようにして作られるものであって、それだけを暗記しても意味がありません。ましてやデータだけを覚えることは何の意味もありません。みなさんが大学で学ぶ最も重要なことの一つは、自らの手でデータと理論を両方扱い、(1) データから理論を構築する、(2) 理論から現実の事象を推測する、つまり、現実世界と抽象世界を往復する能力を養うことです。

もう少し具体的に考えてみましょう。1冊の本を分解してみましょう。ある本を読んだときに、ふーん、面白かった、で終わってしまっただけでははいけません。著者が主張したかったのは「一言でいえば」何だったのか？これを必ず理解する必要があります。「一言でいえば」というところが大切です。何分もかかるようでは、皆さんの頭の中で、著者の提供した statement と data の区別ができていないのです。（くだらない本の場合は主張がない場合もありますよ。）著者の主張が理解できたら、今度は、その主張を展開するために、どのような議論を構築しているのか、考えてみます。Aを言うためにBを出し、Bを言うためにCを出し、というように議論はどんどん細部に入っていく、そして最終的に生のデータ（歴史学では史料と呼びます）に行き当たります。そうすると、しっかりとした史料的裏付けがあって初めてきちんとした歴史の statement が主張できる、ということになります。

トピックの選び方

論文で何を扱うかを決める時点で、論文の勝負は半分ぐらいついてしまいます。論文として良いトピックと良くない（くだらない、つまらない）トピックがあります。次の幾つかの点を考慮しながら決めて下さい。

- ・ 与えられた枚数の中で処理できるサイズのトピックであること。たとえば、2000字の論文で、古代から現代までの女性史を扱うことはできません。
- ・ 自分が自発的に興味を持てるトピックにすること。何となく選んでしまって先が続かないことがよくあります。論文を書き進める原動力は自分の中にしか存在しないのです。
- ・ 資料を使って検証可能なトピックを選ぶこと。たとえば、「なぜお酒がこんなにおいしいのか」論文を書きたいとしても、歴史の資料を使って検証することができなければ、歴史の論文にはなりません。（生理学や医学では可能かもしれませんが・・・）
- ・ あまりに「無難」なトピックは避けること。もう既にわかっていることをテーマにしても面白くないですし、何の発見也没有ありません。
- ・ 迷いすぎないこと。およそまともな人間なら、同じように興味を持てるトピックがいくつもあるはずですが、自分にとってこれが究極のトピックであるというようなものを求めてしまうと、逆に自信をなくしてしまいます。これから論文を書く機会はいくらでもあります。とりあえず決めてしまって、進めるぐらいで十分です。
- ・ 質問の形でテーマ設定を試みること。たとえば、「産業革命について」論文を書くよりは、「なぜイギリスで産業革命が起こったのか？」とか、「産業革命を起こすのに必要な前提条件は何だろうか？」などの質問の形でテーマを考えてみましょう。それに対する皆さんの「答え」が、前述したstatementになっていきます。

論文の構成

皆さんが書くことになる論文も、プロ（研究者）が書く学術論文も、基本的には同じものです。議論を構築するもっとも一般的な様式は次のようなものです。

| | |
|------|-----------------------------------|
| はじめに | ←自分の問題意識や関心、何を明らかにしようとするのか述べます。 |
| 第1節 | ←本論で議論を展開します。短い論文なら節で区切る必要はありません。 |
| 第2節 | |
| ・・・ | ←内容がどのぐらいに分かれるかは、皆さんの判断です。 |
| 第×節 | ←本論の終わり。 |
| おわりに | ←何をどう明らかにしたのか、そして今後の課題について述べます。 |
| 参考文献 | |

実際に書き始める前に、自分の材料をどのように配置して上のような構成を作るか、紙にフローチャートのような表を作ると書きやすくなります。また、そうすることで、結論を見失ってしまったり、書き出しと終わりで違うことを言ってしまうのを防ぐことができます。

もうおわかりのことと思いますが、論文の結論 statement というのは、論文の最後にちょこっと付け足す感想めいたコメントでは全くないのです。（高校までの「レポート」では、ただの「感想」が結論として許されてきたと思いますが、大学では通用しません。）結論には、たしかに「結」という言葉がついていますし、論文の終わりではっきりとした形で要約はします。が、結論というのは論文全体で論証するものなのです。あるいは、先に述べたように、論文そのものなのです。

論文の体裁について

用紙

- ・ A4用紙に横書きでワープロ印刷します。紙は縦長の方向で使用します。
- ・ 用紙の左右の余白はそれぞれ2.5cmあけること。用紙の上下の余白は、それぞれ5cmあけること。欄外には、教員やTAがコメントを書き込むので、なるべく余白を大きくとった方が便利です。また、上部は綴じる部分の余裕が必要です。
- ・ ページ番号を各ページにつけること。位置は、用紙下端から3cm程度の中央部分が標準的です。本文と同じ字体、大きさの算用数字を用います。カッコやハイフンで囲む必要はありません。

- ・クラス内で提出するものについては、ページの左上をホッチキスで綴じること。事務室に提出するものは、専用の表紙を事務室で受け取り、表紙に指定してある箇所をホッチキスで綴じること。
- ・教員に提出するものとは別に、自分用にもう1部印刷して持っておくと安心です。

文字

- ・原則として、横に1行あたり40字、縦が25行入れて、1ページに1000字入るように設定すること。西洋史では、手書きで論文を提出することを認めません。
- ・日本語は明朝系の字体を用い、ゴシック系は文字の見出しなどにとどめること。同様に、欧文文字はセリフ系（Times, Century, Bookman等）を本文に、サンセリフ系（Arial, Helvetica等）を見出し用に使います。
- ・本文の大きさは10.5ポイント。

長さ

- ・それぞれの科目で、教員によって指示された長さを守ること。基本的には本文部分の長さが指定されます。
- ・本文以外に、表紙や参考文献目録が必要です。

日本語

- ・内容の区切りに従って段落を分けること。各段落は書き出しを1字下げること。
- ・各段落の書き出しの文（センテンス）は、その段落の内容を要約するような内容にすること（トピック・センテンス）。トピック・センテンスについては、教室で説明を受けて下さい。
- ・研究者や歴史上の人物の名前は、敬称略、つまり呼び捨てが原則です。日本では、マスコミを含め、外国人を呼び捨てにして日本人には敬称を付ける（たとえば加茂監督とトルシエ）という奇妙な習慣があるようです。研究者の中にも、外国人研究者を呼び捨てにして日本人研究者に「氏」や「先生」を付ける人がいます。皆さんはまねをしてはいけません。
- ・引用を途中省略するときは「○○○○○（中略）○○○○○」のように、省略箇所を明示します。
- ・常体（である体）で書くこと。この『教学の手引き』のような敬体（です体・ですます体）で書いてはいけません。

コンピュータ使用上の注意

1. とにかく保存

- ・コンピュータで作業する場合、保存はこまめにすること。書いている最中は、5分に1回、あるいは1段落を書くごとに、トイレに行くたびに、ぐらゐの頻度で保存する習慣をつけること。
- ・Microsoft Wordを含む大抵のワープロ・ソフトは「Ctrl+S」で保存できます。
- ・コンピュータ内蔵のハード・ディスクは必ず壊れます。フロッピーやMOにバックアップをとること。3時間ごとに、ワープロ・ソフトを終了して、エクスプローラを使ってハード・ディスク上の重要ファイルをフロッピーにコピーすること。この説明がわからない人はただちにWindowsの復習を。
- ・フロッピー・ディスクの信頼性は低いとってください。フロッピーのコピーは複数枚作ること。
- ・ファイルをフロッピー・ディスクだけで運用するのも危険です。論文作成作業中はあくまでもハード・ディスクにファイルを置くこと。フロッピーはあくまでもバックアップ用です。

2. 再起動

- ・再起動をこまめにすること。コンピュータは使うほどにメモリーにゴミがたまって不安定になります。
- ・ご飯を食べる、休憩をとるごとにワープロ・ソフトを終了し、システムを再起動すること。3時間に1回が原則。上述のフロッピーへのバックアップとあわせて行うと良いでしょう。
- ・特にノートブックは、スイッチを切ったつもりでもスリープ状態になっているだけのことがあります。そのため、何週間も再起動せずに使ってしまう人がいます。これは大変危険です。

3. 印刷も立派なバックアップ

- ・機械のトラブルでフロッピーが破壊されたり、書き込まれていなかったりすることがたまにあります。
- ・このような最悪の事態に備えて、紙に出しておくことも大切です。実際に仕事をしているという「証拠」にもなります。仕事を終了する前に、その日の成果を印刷すること。

4. それでも不測の事態に備えて

- ・用紙とインクのストックを確認すること。プリンターのインクが何枚ぐらゐ印刷できるのかあらかじめ調べ、多めに用意しておくこと。仕上げの印刷をしているうちにとんでもない間違いを見つけて全部印刷し直し、ということもよくあります。

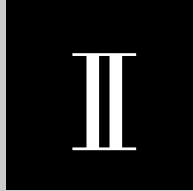
テーマリサーチ型ゼミナールにおける卒業論文（卒論形式・非卒論形式）の提出について

テーマリサーチ型ゼミナールでは、従来のような卒業論文の提出（卒論形式）もありますが、クラスによっては、卒論形式に代えて、共同で制作物（成果物）を仕上げ提出する「非卒論形式」もあります。必ずクラス内で担当教員に、いずれかの形式なのかを確認してから作成してください。

◆体裁について

| | | |
|-------------|-----------|---|
| 卒論形式で制作の場合 | 文書体裁 | 字数：12,000字以上20,000字以下 英文の場合：65ストローク×25行、A4用紙15枚以上30枚以下 ファイル形式・書式・用紙の大きさなど：クラス担当者の指示に従うこと。 必ず 2部 提出すること。添付資料がある場合は、添付資料も同様に必ず 2部 提出すること。 |
| | 表紙等に関する体裁 | 題目、学生証番号、専攻、プログラム、氏名を必ず記載すること。 |
| | その他の注意 | 学生本人のみの執筆による単著であること。共同執筆の類はこれに該当しない。 |
| 非卒論形式で制作の場合 | 文書・表紙体裁 | 体裁についてはクラス担当者の指示に従うこと。 必ず 2部 提出すること。添付資料がある場合は、添付資料も同様に必ず 2部 提出すること。 |
| | その他の注意 | 1. 制作物（成果物）には題目、学生証番号、専攻・プログラム、氏名を必ず記載するか添付すること。また、審査教員シールを貼付すること（貼付箇所は自由）。 2. 制作物（成果物）とともに、4,000字以上の個人レポートを提出すること。 ※制作物（成果物）と個人レポートの両方を提出して初めて「卒論提出」となる。 ※個人レポートの表紙裏にも審査教員シールを貼付すること。 3. 口頭試問に相当するものとして、「卒業制作発表会（仮称）」を実施することがある。実施日については、担当教員の指示に従うこと。 |

◆上記の他の提出に関する諸注意は基本的に履修要項の「『卒業論文』の提出について」に従ってください。



科目一覧と履修方法

1 科目一覧

西洋史学専攻全回生

| | 1回生 | 2回生 | 3回生 | 4回生 |
|-------|-----------------|--------------------|--------------------|-------------------------------|
| 概 説 | 西洋史概説Ⅰ～Ⅴ(各2) | | | |
| 講 読 | | * # 西洋史講読演習Ⅰ(4)：通年 | | |
| そ の 他 | | 西洋史学史(2) | * 西洋史の理論と実践Ⅰ・Ⅱ(各2) | * 西洋史の理論と実践Ⅲ・Ⅳ(各2) |
| 特殊講義 | | # 西洋史特殊講義Ⅰ～Ⅷ(各2) | | |
| 小 集 団 | * 西洋史研究入門(4)：通年 | * 西洋史基礎講読(4)：通年 | # 西洋史講読演習Ⅱ(4)：通年 | # 西洋史演習(4)：通年 * 卒業論文(4)：通年 |

1. 科目名のカッコ内数字は単位数を示します。
2. *のついた科目は、西洋史学専攻の学生のみが受講できます。
3. #のついた科目は、重複受講ができます。
4. 下線のついた科目は、その回生でしか受講できません。

2 履修方法

必修科目 (卒業するために必ず単位を修得しなければならない科目)

| | | |
|---|--|---------|
| ① | 西洋史演習(4回生以上) ゼミナールⅡ(テーマリサーチ)(4回生以上) | 4単位選択必修 |
| ② | 卒業論文(4回生以上) | 4単位必修 |

登録必修科目 (必ず登録・受講しなければならない科目)

| | | |
|---|---|-------------------------------------|
| ③ | 西洋史概説Ⅰ～Ⅴ(1回生以上) | Ⅰ～Ⅴ全て登録必修。 1～2回生にかけて履修することが望ましい。 |
| ④ | 西洋史講読演習Ⅰ(2回生以上) | 2科目8単位 (2・3回生で各4単位) |
| ⑤ | 西洋史特殊講義Ⅰ～Ⅷ(2回生以上) | 2科目4単位選択 |
| ⑥ | 西洋史研究入門(1回生のみ) | 1科目4単位 |
| ⑦ | 西洋史基礎講読(2回生のみ) | 1科目4単位 |
| ⑧ | 西洋史講読演習Ⅱ(3回生のみ) ゼミナールⅠ(テーマリサーチ)(3回生のみ) | 1科目4単位選択 |

専攻科目以外の登録必修科目

- ・リテラシー入門(教養科目：2単位) 1回生前期
- ・史学概論Ⅰ・Ⅱ(人文科学総合講座：各2単位) 1回生前期・後期
- ・外国文化講読(第一外国語)(人文科学総合講座：4単位) 3回生通年 ※2008年度以前入学生のみ

※社会人学生の皆さんは、登録必修科目はありません。ただし、条件の許す限り、上記の登録必修科目は履修してください。

